社会福祉法人
三幸福祉会　清華苑
広報誌「はな華」

はな華
HanaHana

VOL.5
2020

STAFF INFORMATION

資格取得者

社会福祉士

池田滋彦
大中由宣
田渕桃香
岡本浩弥
藤井将矢

介護福祉士

明松葵
久保田千里
宮崎眞子
井上優
粟田瑞希
中川莉緒
坂田典子
藤田江梨花
平田麻澄
下雅意桃歌
坂井花乃穂
上藤恵美子
池田茉由
飯貝佳奈
藤田和恵

表彰発表

永年勤続表彰

勤続20年表彰

廣田恵美子
十倉英毅
間処浩美
池田滋彦

勤続10年表彰

石田恭子
鎌田紘輔
廣野幸穂
夏木今日子
小谷麻里
前田真規子

研修表彰

小山内広樹
山下美樹
岩西太一
溝部あや
間処浩美
斧慎太郎
中本裕大
松井敬子
大中由宣
大久保健太
竹中胡桃
前川真弓

法人発展貢献賞

藤原亮太
川口琴音
鶴谷友奈
津田智行
大中由宣
押部なつき
中里桃子
シニアファッションショー実行委員会

新入職員

今年度は、法人全体で十七名の新入職員が入職しました。四月二日に入社式が行われ、現在は各配属先で勤務しています。これからの成長に期待が膨らみます。

2020/4/2　桜の木の下で新入職員全員での集合写真

表紙の写真　睡蓮　学名 Nymphaea 科/属名 スイレン科スイレン属　花言葉：信頼（ピンク）

ちょうど、広報誌の締切りに追われながら編集作業をしている時の事でした。いつもお世話になっている業者のMさんが事務所に来られ、「これどうぞ」とお庭に咲いていた睡蓮の花を一輪くださいました。とてもかわいいお花でしたので、今回の表紙にさせて頂きました。Mさん、ありがとうございました。（広報室）

HanaHana
社会福祉法人　三幸福祉会　清華苑　広報誌「はな華」
第5号　2020年6月15日発行

発行　社会福祉法人　三幸福祉会　清華苑　広報室
〒674-0051　明石市大久保町大窪3104-1
TEL　078-934-0800　URL http://seikaen.jp/

はな華
HanaHana
社会福祉法人　三幸福祉会
広報誌「はな華」

第５号
２０２０年６月１５日発行

Pick Up!
「清華苑の看取り」

特別養護老人ホーム　清華苑では、多くの看取り介護を行っています。
人を幸せにする事ができる看取り介護とは何か。
生活相談員、介護職員、ご家族、それぞれの視点から看取り介護への想いを綴ります。

看取りから学ぶこと

特別養護老人ホーム 清華苑では、毎年約四十名の方を看取ります。日々、看介護はもとより、それぞれの部署が自らの持ち場で最良の看取り介護が出来るように従事しています。

調理部門は「この食事が最期の食事かもしれないということを念頭において、心を込めた食事提供を行う」という目標を掲げ、事務部門は「ご家族や地域の方々と最初に関わる窓口であるため迅速、丁寧に担当者に繋ぐことができるように常に準備する」との目標のもと、窓口や電話対応を行います。直接処遇職員だけではなく、それぞれの部署の協力があってはじめて看取り介護が成立します。

生の帰結は死であります。

その前に一切は無力であります。学歴も、名誉も、地位も、財産も、形あるものはすべてが壊れます。しかし、その人が残してくれた無形の教訓は、肉体とともに死滅するのではありません。その人からの教えは消えず、影響も消えません。事実、特養の夢殿（仏間）に参り、法人創設者の会長、苑長お二人の遺影を見る度に背筋が伸びる思いです。私が忘れてしまわない限り、心に残してくれた数々の教えは決して消し去ることはできません。

約四十名の命という無形の教えを四十一人目の看取りにどう生かすかも働き方次第です。

今日一日、この瞬間、瞬間に、心を燃え立たせ、働いていきたいと思います。

（副施設長　生活相談員　岩西太一）

特別養護老人ホーム 清華苑では、毎年４月８日の前後にお釈迦様の誕生を祝う「花まつり」を開催しています。掲載している写真は、過去に開催した時の様子ですが、今年は、新型コロナウイルスの影響で残念ながらご利用者が大勢で集まることができず、スタッフだけで慰霊祭をとり行いました。

ご利用者の心に寄り添う

私が当時、ケース担当を務めさせて頂いたご利用者Ａさんのお話です。

ご入苑された当初のＡさんは、心を閉ざされているようで居室から出て来ない、食事も食べようとしない、職員が話しかけても必要最低限の会話だけで誰も寄せ付けない雰囲気がある方でした。

当時、同じフロアの職員同士で、「なんでＡさんは、居室から出てきてくれないのか？」「なんでＡさんは、食事を食べてくれないのか？」「どうしたらＡさんは、笑顔を見せてくれるのか？」と、話したことが何度もありました。

その後、職員一人一人が根気よくＡさんに声を掛け、コミュニケーションを取ることを続けた結果、徐々にＡさんとの距離が近くなり、職員の誰とでも会話をされ、ホールで食事も召し上がられるようになりました。

Ａさんと打ち解ける事が出来たある日、「私は、Ａさんがご入苑された当初、どう接したらいいのか、悩んだ事がありました」と打ち明けました。するとＡさんは、「ごめんね。みんなには苦労を掛けたね。ここへ入ってきた時は旦那と息子に先立たれて自分も病気になって、もう、いつ死んでもいいと思っとった。でも今は思わない。ここの職員さんみんな気に掛けてくれて優しいから。一生懸命いろんな人のお世話しとってやね」と言われました。

Ａさんから頂いたお言葉は、ほんとに嬉しかったです。職員一人一人がＡさんに積極的に関わりを持つ事が実を結んだと実感しました。

その後、月日は流れ、Ａさんの看取りを終えました。過去のことを振り返りながら、今後のターミナルケアが職員一人一人の思い遣りに溢れたケアとなるよう願った日となりました。

ターミナルケアで大切な事をＡさんとの関わりを通じて学びました。Ａさんから頂いた言葉は生涯忘れません。最期までケース担当として携われたことに感謝しています。

Ａさん、ありがとう。

（介護チーフ　竹井千絵）

ご家族と一緒に和やかなひとときを過ごされている數益様

ご家族より頂いた お手紙をご紹介いたします

清華苑　職員の皆様

ご無沙汰しております。數益ゑみ子の家族（孫）です。師走のあわただしい季節になりましたが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

早いもので、祖母が亡くなってもう三か月が過ぎ、本日無事に百箇日の法要を済ませました。未だに実感がなく、清華苑に行くと今も祖母に会えるような気がします。

亡くなった祖母と対面した時、九十七歳とは思えない本当に綺麗な顔をしていたのがとても印象的でした。丁寧にお化粧をしていただいたこともあるでしょうが、穏やかに旅立ったことが表情から伺え、家族皆で安心しました。退所時にはゆっくりお礼をお伝えできなかったので改めて筆をとらせていただきました。

大正十一年に生まれた祖母は、共働きだった私たちの両親の代わりに、家事一切を請け負い、私たち孫を育ててくれました。気が強くてなかなか人間関係もうまく築けなかった祖母は、耳が遠くなってコミュニケーションが円滑にいかなくなったことや娘を亡くしたショックが影響したのか、八十歳半ばで認知症と診断されました。

それからは、デイサービスやホームヘルパーのお世話になり、家で看れなくなってからは、グループホーム、老健施設、特養…と施設を転々としました。ですが、失礼ながら、なかなか安心してお世話になれる施設が見つからず、困っていた時に清華苑を紹介していただきました。

始めは正直、どこも変わらないだろうと諦めに近い心境で入所させていただいたのですが、清華苑はそれまでお世話になった施設とは全く違う施設でした。何といっても職員の皆様の雰囲気がとても明るく、介護も丁寧で、本当に安心して祖母をお任せすることができました。

特に介護職員の方々におかれましては、日々大変なお仕事で、きっと心がすり減るようなことも多々あるかとお察ししますが、いつも元気に笑顔で接してくださり、プロフェッショナルなお仕事ぶりに本当に頭の下がる思いでした。

お会いする度に、私たち家族がいない時に祖母がどんな話をしていたか、どんな歌を歌っていたか等、教えて下さり、いつも祖母とコミュニケーションをとっていただいていた様子が伺えて、嬉しかったです。

また、食べることが大好きだった祖母は、食材にこだわった美味しいお料理をとても楽しみにしており、いつも「おいしい、おいしい」と言って、食事をいただいていました。ターミナル期を迎えてからも、口から食事をとるリスクを考慮しつつ、毎日様子を細かく診ながら対応してくださり、ありがとうございました。

お陰様で祖母は亡くなる当日まで口から食事をとることができ、幸せだったと思います。最期の最期に本当に素晴らしい施設でお世話になり、天寿を全うできたこと、家族一同、心より感謝しております。祖母もきっと喜んでいたと思います。

四年間、毎日、毎日、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。母も居心地が良かったようで、毎日のように清華苑に出向いていましたので、通えなくなって寂しそうです。職員の方や他の利用者の方々との交流が母の生き甲斐になっていたようで「利用者の人たち、頻繁に行くから私の事、職員やと勘違いして色々頼んでくるんよ。」と嬉しそうにしていました。

ビアパーティーや夏祭りなどの行事も私たち家族の楽しみで、祖母だけでなく、家族も一緒にサポートしていただき、本当に温かい施設だったと、しみじみ感じています。

祖母が繋いでくれたこのご縁を大切に、今後も行事等機会があれば参加させていただきたいと思っています。

末筆ではございますが、清華苑のますますのご発展と職員の皆様のご活躍をお祈りし、心より御礼申し上げます。

令和元年十二月十四日

數益　ゑみ子の家族

栗本　邦子

志穂子

真穂子

（原文ママ掲載）

ケース担当の介護職員と一緒に笑顔の數益様

MEDIA INFORMATION

グループホームで心を繋ぐお手紙の取り組みが始まる！

新型コロナウイルス感染防止のため面会制限を行う中、「グループホーム清華苑」では、ご利用者、ご家族それぞれに安心して頂く事を目的に写真付きのお手紙をご家族に出す取り組みをはじめました。

その後、法人内の他の施設でも同様の取り組みが広がっていきました。会えない今だからこそ手紙の文字から伝わる思いが胸を打ちます。

企画者でもある「グループホーム清華苑」の山本麻世管理者にインタビューしました。

この手紙のやりとりを考えられたきっかけは？

「法人内の全事業所で面会制限を行うことが決まったタイミングで取り組みを始めました。特にご家族から要望があったわけではなく、以前から年賀状や暑中見舞いをご利用者からご家族へ書いてもらっていたので自然とその発想に繋がり、ご利用者、ご家族ともに安心してもらう方法として、写真付きのお手紙に言葉を添えることにしました。」

ご利用者やご家族からの反応はどうですか？

「ご家族からお手紙でお返事をいただくこともあり、ご利用者も喜ばれ、涙するご利用者もいます。もらったお手紙を毎日眺めている方もおられます。お手紙の返事をお電話でいただいて、会話が弾むこともあります。離れていても心は一つ。お手紙やお電話での会話が心の安らぎとなっています。」

グループホーム　清華苑
管理者　山本麻世

4月２３日の神戸新聞朝刊に掲載されました。

面会中止の老人福祉施設

はがきに写真 心の安らぎを

入居者の様子撮影 家族の返信 楽しみに

ビデオ通話も試験導入

column

清華苑で働く職員が仕事を通じて経験した心温まるエピソードをご紹介します。

心温まるエピソード

三谷　恵　通所リハビリテーション　清華苑すいすい　主任　支援相談員

様々なご利用者と関わる中、とても印象に残っている事があります。

Ａさんは六十一歳という若さで脳梗塞を起こし、脳浮腫が増大したため、開頭減圧術という頭を大きく開頭して頭蓋骨の一部を外すという手術をされていました。その為、重度の失語症があり、Ａさんは「いー！」という発語しかできません。意思疎通がうまく図れないという状況の中で利用が開始となりました。

言葉でのコミュニケーションが難しく、スタッフみんな頭をかかえる毎日。Ａさんは頑固な面もあり、入浴後の処置を嫌がり、スタッフの手に噛みつこうとした時もありました。

しかし、ご利用されているうちに、徐々に表情や声のトーン等からＡさんの伝えたいことがわかるようになりました。いつも怒りっぽいＡさんですが、利用には拒否は見られず必ず休まずに来てくれていました。時々見せてくれる笑顔はとってもいい表情をされました。送迎車内で、他の方がお酒の話をしていたので、Ａさんにも話をふってみると、お酒が好きだったとニコニコしながら話をされることもありました。

そんなＡさんは、利用中に体調不良があり、早めに自宅へお送りしました。その日のうちにご家族と病院受診されましたが診断は風邪との事。しかし、夕方から徐々に息苦しさ、お腹の調子の悪さがあり、なかなか改善せず、翌日にご家族が救急搬送の手配をするも、救急車到着前には心停止状態となりました。

その後、病院に運ばれましたが、意識が回復する事はなく、そのまま永眠されました。

その後、同居されていた妹様より「是非、兄の顔を見てあげてほしい」と連絡がありました。利用中に撮ったＡさんの写真を持参し、ご自宅へ迎いました。妹様からは、「清華苑すいすいには、本当に楽しく通っていました。自宅ではほとんど笑顔も見せない人だったのに。清華苑すいすいでの写真を見ると、見たことのない笑顔で笑っています。本当にありがとうございました。」とおっしゃって頂きました。

そして、葬儀の際には、利用中のにこやかに写っているＡさんのお写真を遺影として使って下さいました。本当に有難い事で涙が溢れました。

仕事を通じて、ご利用者だけでなく、ご家族にも感謝して頂けることは、本当に幸せなことだと実感しました。これからも、このことを忘れずに仕事に取り組んでいきたいと思います。

（主任　支援相談員　三谷恵）